北星論集(文) 第24号　　March 1987

【論　説】

『ハーメルンの笛吹き』伝説と子ども

平　倫子

〈1〉

『ハーメルンの笛吹き男』は，北ドイツの小さな町ハーメルンにまつわる伝説である。よく知られるようになったきっかけは，グリム兄弟(ヤーコプ・グリム 1785—1863，ヴィルヘルム・グリム　1786—1859) が収集し，1816年に出版した『ドイツ伝説集』の中の「ハーメルンの子供たち」による。

(日本でのグリム研究はもっぱら『童話集』にかたより，『伝説集』は定本になる日本語版のテクストが見出せなかったので，次の引用は，阿部謹也氏の著書『ハーメルンの笛吹き男』から借用したものであることをおことわりしておく。)

1284年にハーメルンの町に不思議な男が現われた。この男は様々な色の混った布で出来た上衣を着ていたので『まだら男』と呼ばれていたという。男は自ら鼠捕り男だと称し，いくらかの金を払えばこの町の鼠どもを退治してみせると約束した。市民たちはこの男と取引を結び，一定額の報酬を支払うことを約束した。そこで鼠捕り男は笛をとり出し，吹きならした。すると間もなく，すべての家々から鼠どもが走り出て来て男の周りに群がった。もう一匹も残っていないと思ったところで男は〔町から〕出て行き，鼠の大群もあとについていった。こうして男はヴェーゼル河まで鼠どもを連れてゆき，そこで服をからげて水の中に入っていった。鼠どもも皆男のあとについて行き，溺れてしまった。

市民たちは鼠の災難を免れると，報酬を約束したことを後悔し，いろいろな口実を並べたてて男に支払いを拒絶した。男は烈しく怒って

町を去っていった。6月26日のヨハネとパウロの日の朝――他の伝承によると昼頃となっているが――，男は再びハーメルンの町に現われた。今度は恐ろしい顔をした狩人のいで立ちで，赤い奇妙な帽子をかぶっていた男は小路で笛を吹きならした。やがて今度は鼠ではなく四歳以上の少年少女が大勢走り寄ってきた。そのなかには市長の成人した娘もいた。子供たちの群は男のあとをついて行き，山に着くとその男もろとも消え失せた。

こうした事態を目撃したのは，幼児を抱いて遠くからついていった一人の子守り娘で，娘はやがて引き返して町に戻り，町中に知らせたのである。子供たちの親は皆家々の戸口からいっせいに走り出てきて，悲しみで胸がはりさけんばかりになりながらわが子を探し求めた。母親たちは悲しみの叫び声をあげて泣きくずれた。直ちに海陸あらゆる土地へ使者が派遣され，子供たちかあるいは何か探索の手がかりになるものをみなかったかが照会された。しかしすべては徒労であった。消え去ったのは全体で130人の子供たちであった。

二，三の人のいうところによると，盲目と唖の二人の子供があとになって戻ってきたという。盲目の子はその場所を示すことが出来なかったがどのようにして楽師〈笛吹き男〉についていったのかを説明することは出来た。唖の子は場所を示すことは出来たが，何も語れなかった。ある少年はシャツのままとび出したので，上衣を取りに戻ったために不運を免れた。この子が再びとって帰したとき，他の子供たちは丘の穴のなかに消えてしまっていたからである。

子供たちが市門まで通り抜けていった路は十八世紀中葉においても（おそらく今日でも）舞楽禁制通りと呼ばれた。ここでは舞踊も諸楽器の演奏も禁じられていたからである。花嫁行列が音楽の伴奏を受けながら教会から出てくる時も，この小路では楽師も演奏をやめて静粛に通りすぎなければならなかった。子供たちが消え失せたハーメルン近郊の山はポッペンベルクと呼ばれ，麓の左右に二つの石が十字形に立てられていた。二，三の者のいうところでは子供たちは穴を通り抜け，ジーベンビュルゲン（今日のハンガリア東部の山地）で再び地上に現われたという。

ハーメルンの市民はこの出来事を市の記録簿に書き留めた。それに

よると，市民は子供たちの失踪の日を起点にして年月を数えていたという。ザイフリートによると，市の記録簿には6月26日ではなく22日と記されているという。市参事会堂には次のような文字が刻まれている。

キリスト生誕後の1284年に
ハーメルンの町から連れ去られた
それは当市生まれの130人の子供たち
笛吹き男に導かれ，コッペンで消え失せた

また新門には次のようなラテン語の碑文が刻まれている。

マグス（魔王）が130人の子供を町から攫っていってから，272年ののちこの門は建立された。

1572年に市長はこの話を教会の窓に画かせ，それに必要な讃を付したが，その大部分は判読不可能となっている。そこにはひとつのメダルも彫られている。(1)

マールブルク大学で法律学を専攻していたグリム兄弟は，師F.K.V.サヴィニーから，史料の綿密な歴史的考察の方法を学ぶが，このことがのちの兄弟の仕事に決定的な影響をおよぼすことになった。サヴィニーが法律の分野で研究したことを言語と文学の分野で試みたのである。さらにサヴィニーをとうして，ドイツ民謡集『少年の不思議な角笛』の収集，刊行をしたC.ブレンターノやA.V.アルニムと知りあって，その仕事に強い刺激をうけ，かねてから関心をよせていた民謡やメルヘン，伝説の体系的収集をこころざすに至った。

1807年3月9日付サヴィニー宛の手紙で，ヤーコプは，「法学の研究はもっとも高いものであると評価はいたしますが，今はポエジーと文学の歴史の研究のほうに強くひかれます」(2)と，法律学との訣別を伝えている。以後1812年にはあの有名な『子どもと家庭のメルヘン集』（日本では『グリム童話集』といわれているもの）第一巻を刊行し，1815年には第二巻

を，そして1822年には第三巻として注釈書を刊行し，精力的な収集および研究活動をする。その間にあって，1816年『ドイツ伝説集』第一巻が刊行された。それは場所にちなむ伝説（362篇）をあつめたもので，「ハーメルンの子どもたち」や「ビンゲンのねずみの塔」など広く親しまれているものも含まれている。さらに1818年，歴史にちなむ伝説(217篇)を『ドイツ伝説集』第二巻として刊行した。ヤーコプは第一巻の序文で，童話と伝説のちがいを，次のようにのべている。

> 童話（メルヒェン）は詩的で，伝説（ザーゲ）は歴史的である。童話は，その本来の開花と完成の姿をとって，ほとんどそれ自身のうちにしっかりと根をおろしている。伝説は色彩の多様性に乏しく，何か既知のもの，意識されているものに，ある場所，または歴史によって確かめられている名に結びつく，という特殊性をもっている。童話は，子どもらしい世界観察の純粋な思想をとらえ，それに直接，乳のようにやわらかくなごやかに，あるいは蜜のように甘く濃厚に栄養を与え，俗世の重さを持たない。これに反し，伝説は，より強い食物として役立ち，より単純であるが，よりはっきりした色彩を持ち，より多く真剣に考えさせる。(3)

『伝説集』は学究肌の兄ヤーコプが主としてまとめたといわれているが，いくつかの特徴ある話が広く親しまれたほかは，文学的感覚にすぐれた弟ヴィルヘルムが主としてまとめた『グリム童話集』の陰にかくれ，全体として不成功に終ったとみられている。

ところで，「ハーメルンの子供たち」という当初のタイトルが消え，もっぱら「ハーメルンの笛吹き男」として定着しているのは何故だろう。ドイツでは「ハーメルンのねずみ捕り男」（“Der Rattenfänger von Hameln”）として語りつがれてきたこの伝説が，日本で「…笛吹き男」になったのは，一つには1842年R.ブラウニングが詩の形で著した教訓つきの「ハメルンのまだら服の笛吹き男」（“The Pied Piper of Hamelin”）の影響が考えられる。

『日本児童文学史年表』Ⅰ（鳥越信編，明治書院，1975）によれば，この伝説の日本への最初の移入と思われるものは，1923年（大正12年）

の，ブラウニング作，矢崎忠蔵訳「笛吹き翁さん」（「少年文学」）である。これはブラウニングの十五連の詩の一連ずつを一話にまとめ，十五話からなる物語に仕立てている。次に 1934 年（昭和 9 年）浜田広介訳，耳野卯三郎画「魔法の笛」（「幼年倶楽部」）があるが，これは上，下からなる物語で，教訓もついておらず，グリム原典のものと考えられる。さらに『出版年鑑』（出版ニュース社，1965）によれば，子どもの本としてではなく『ブラウニング詩選集』（1923 年）のなかに「ハメルンの笛吹き男」（訳者不詳，文献書院）が出ており，さらに 1928 年（昭和 3 年）『世界の神話伝説大系』の中の「ドイツの神話伝説II」（松村武雄篇）に『斑の笛吹き』がみられる。グリム兄弟著，河村隆史編・訳『ドイツ伝説集・タンホイザー』（東洋文化社，1981 年）では「ハーメルンの子供たち」になっている。

ついでながら，鳥越氏の年表によると，1890 年（明治 23 年）に，洗竹居士訳「僧正はっとう」（「日本之少年」）があるが，これはグリムの『伝説集』第一巻の中の「ビンゲンのねずみの塔」（あるいは「ねずみの塔」とも訳されている）の話であろう。さらに 1902 年（明治 35 年）厳谷小波が大江小波の名で訳している「ライン川の鼠の塔」（「少年世界」）も同じ話である。これらのことから，グリム『伝説集』の中で「ねずみの塔」の話が「ハーメルンの子供たち」よりもかなり早く日本に紹介されていたということがわかる。

ともあれ，「ハーメルンの笛吹き男」は，ハーメルンの民衆の生活を土台にしており，失踪の日付，人数が具体的に示されている，という内容のため多くのヴァリエーションが生まれ語りつがれてきた。ここではこの伝説とその周辺にみられる社会的気風（エトス）から，特に子ども像を浮彫りにしてみたいと思う。次章ではまず，グリム以前のこの伝説の姿を阿部氏の前掲書を参考にして，とりあげてみる。

〈2〉

グリム兄弟が『ドイツ伝説集』の中に集大成するに至るまでのこの伝説の変容過程は，阿部氏によれば，現存する中世の資料が三点あり，その一つは，ハーメルンのマルクト教会の東の窓のガラス絵およびその碑文で，1300 年頃の改築のさいすでに〈笛吹き男と子供たちの失踪〉をモ

チーフとしたガラス絵があった，というものである。しかしこの絵は1592年に模写されたもので，笛吹き男と，子さらいの男と，ヴェーゼル川にねずみをおびきよせているねずみ捕り男の三つの場面を画きこんでいる点で同時代史料としては正確なものではないと阿部氏は「ハメルンの笛吹き男伝説の成立と変貌」(「思想」581号，岩波書店，1972年 pp. 63-64）の中でのべている。碑文は，ハーメルンの郷土史家ハンス・ドバーティンにより「ヨハネとパウロの日（すなわち6月26日）にハーメルン市内で130人の者がカルワリオ山の方向（すなわち東方）へ向い，引率者のもとで多くの危険を冒してコッペンまで連れてゆかれ，そこで消え失せた[4]」と判読されている。

次に古い史料は，1384年頃のハーメルンのミサ書『パッショナーレ』のタイトルページに書かれた，ラテン語の詩で，「1284年，この年は男と女が消え失せた年であり，130人の愛すべきハーメルンの子供たちが天意によってか奪い去られた「ヨハネとパウロの日」のあの年である。人はいう，カルワリオが子供らを皆生きたまま呑み込んだと。キリストよ，このような不幸にみまわれないように罪人を守り給え。」である[5]。

そして三番目の史料は，1430—50年頃に書かれたリューネブルクの手書本である。これは1719年ライプニッツの協力者ダニエル・エーベルハルト・バリングが『ブラウンシュヴァイク年代記』の校正をみているときに，リューネブルクの文書館で発見し，ライプニッツも目を通し，「この伝説のなかには何か真実なものがある」と言ったといわれるもので，ミンデンの修道士，ハインリッヒ・フォン・ヘルフォルト（？—1370）の『金の鎖』の筆写本の最後の頁に追記されていたもの，という。

まったく不思議な奇蹟を伝えよう。それはミンデン司教区内のハーメルン市で主の年1284年の，まさに「ヨハネとパウロの日」に起った出来事である。三十歳位とみられる若い男が橋を渡り，ヴェーゼルフォルテから町に入ってきた。この男は極めて上等の服を着，美しかったので皆感嘆したものである。男は奇妙な形の銀の笛をもっていて町中に吹きならした。するとその笛の音を聞いた子供たちその数およそ130人はすべて男に従って，東門を通ってカルワリオあるいは処刑場のあたりまで行き，そして姿を消してしまった[6]。

これらの中世の三史料から，1284年6月26日，ハーメルンの子どもたち130人が，カルワリオのあたりで行方不明になった，という出来事が確認される。同時にこのことは，さらわれてはじめて大人たちは子どもの存在を意識したのではなかったか，という一つの推測を私にもたらす。

フランスの心性史家フィリップ・アリエスは，ヨーロッパ中世の人びとの子どものとらえ方は，それ以前にあった古代人たちの教育（パイディア）を忘れ，近世初頭になって教育的配慮がふたたび出現するまでの，教育のブランク期として特徴づけることができる，とのべている。[7] つまり子どもは，まだ人になる前の匿名状態にあり，とりかえのきくものであり，その意味で無視されていた。従って子どもは，混沌にほかならなかった。この伝説で子どもが，「引率者のもとでつれてゆかれ，消え失せ」たり，「天意によってか奪い去られ」たり，「笛の音にひかれて姿を消し」たりすることは，混沌（カオス）が，秩序（コスモス）に取り込まれることであり，あるいは自然（nature）から文明（culture）への移行とも考えられる。移行をうながすものは笛の音である。笛はアムピーオーン（Amphion ギリシャ神話に出てくる人物，ゼウスとともにテーベの城壁を築くとき，彼のひいた竪琴の音で石が自然に動いて城壁がおのずから出来たとされる）の竪琴のように神のはたらきをし，人間のもっとも原始的なもの，つまり子どもに作用したわけである。これらのことから，中世の三史料は，この伝説は，〈自然〉対〈文明〉と記号化することもできることを教えてくれる。

〈3〉

次に，16世紀以降グリムまでのものについてみてみよう。阿部氏は，前掲書の中で，伝説の変容の過程を歴史学の観点から深く堀り下げておられるが，それを年代順にまとめると次のようになる。

1. ツァイトロースの日記（1553）
2. フィンチェリウスの『不可思議な徴』（1556）
3. チンメルン伯年代記（1565）
4. ヴィエルスの『悪魔の幻惑について…』（1566）
5. キルヒャーの『普遍的音楽技法』（1650）

冒頭にあげたグリムのテクストの引用の中で,最後のラテン語の碑文が,事件の272年後にたてられたとあるが，それにひとつの解答を与えてくれる史料がバンベルクの市長代理ツァイトロースによる日記である。彼は1553年，辺境伯アルブレヒト・アルキビアデスとザクセン公モーリッツとの戦いに際し，人質としてとらえられたが，のち故郷へ帰る途中立寄ったハーメルンで，市民の語る子どもの失踪の話をきき，次のように記している。

> 1283年楽師とみられるいろいろな色のまざり合った服を身につけた大男が現われ，笛を吹きならした。すると130人の子どもが一緒に走り出し，カルワリオの山にゆき，そこで沈んでいった。母親たちが追いすがるとこの男は，300年たったらまたやってきてもっと多くの子供たちをさらうぞ，と脅したという。300年後の1583年をあと30年と数えて市民は恐れおののいていた。(8)

市民のおののきは，近い将来の災いの予告に対する恐怖のためばかりではなく，51年から52年にかけての大火，52年のヴェーゼル川の氾濫，不作と物価高，ペストの流行など，たび重なる不安によるものであった。さらに1540年に新教ルター派にかわって以来つづいている宗教改革にともなうあつれきも，ハーメルン市民の日常に暗い影を落していた。つまり市のカトリック律院は，市が新教に移行したあとも権力を誇示し，あらゆる不幸は神罰による，といった呪術的思想をうちだし，市民を不安の底におとし入れていたのである。そして庶民のうっ屈した日常生活と疲労の濃さを見た市当局と教会は，彼らを教導するための手段としてこの伝説を利用することを考え，中世以来定まった形をもたずに伝えられてきた「130人の子どもの失踪」の伝説に，市上層部のための正統化をほどこし，市の新門にあのラテン語の碑文を彫らせたのであった。碑文では，笛吹き男はマグスになっているが，悪魔に転化させたのは明らかに神学者や聖職者や市参事会などの作為によるものであった。市参事会堂に刻まれた文字も，市側にとって不利な点はとりのぞかれ，庶民の口伝えのものとはおよそかけはなれたものになった。

当時この伝説は，遍歴する職人たちによりひろく知られるようになっ

ており，神学者たちもこぞって関心をよせていた。ヨプス・フィンチェリウスの『不可思議な徴』（フランクフルト 1556 年）には，つぎのように書かれている。

悪魔の魔力と邪悪さについて，私はひとつの真実の話を伝えよう。およそ 180 年前，ザクセンのヴェーゼル河ぞいのハーメルンの町にマリア・マグダレナの日（7 月 22 日）に悪魔が人間の姿をして現われ，小路を徘回して笛を吹き鳴らし，少年少女など，多くの子どもを誘い出し，市門を出て山までつれ去った。そして悪魔は子供らとともに忽然として消え去った。子どもらがどこへ行ったのか誰も知るすべもなかった。遠くから子供らのあとをついていった子守娘が親たちに急を知らせたので，海陸をとわずあらゆるところに探索の目が向けられた。子どもらがさらわれ，連れ去られたのか，どこへ行ったのか誰に聞いても知る人とてなかった。この事件は両親をいたく悲しませ，犯した罪に対する神の怒りのおそろしい例となった。この事件は，ハーメルン市の法書のなかにも書かれており，多くの高位の人々によって読まれ，語りつがれた。(9)

これは，事件の伝え手として子守娘がはじめて登場する点で目新しいが，それだけでなく，庶民の語りついできた伝説を，高位の人々の読みものとし，しかも流通性に富む最初の活字本として決定的な影響をもったものとして重要で，これ以後この伝説は，人間の罪に対する神の怒り，という教訓をもり込んだものとして全ドイツにひろまることになる。

1565 年頃の『チンメルン伯年代記』に，1538 年にメスキルヒでねずみの被害があり，放浪の冒険家アーベントイアーによって駆逐されたこと，1557 年にもシュワーベンガウにねずみの被害があったと伝え，この二つの話の間に「ハーメルンの鼠捕り男」の話が挿入されている。そしてこの年代記ではじめて，鼠捕り男が，子どもたちの失踪と結びついてあらわれる。(10) さらに 1566 年，ベーゼルで出版されたヨハンネス・ヴィエルス（1515—1588）の『悪魔の幻惑について…』では，悪魔のはかりごとの一例としてハーメルンの伝説をとり上げ，「いろいろな色のまざった服を着た笛吹き男が，130 人の子ども達をコッペンの近くに連れてゆき，消え

失せた」と伝え，さらに，市の裏切りに対する笛吹き男の報復がのべられて，この伝説に新しい復讐のモチーフを加えている。[11]

1650年，自然科学者アタナシウス・キルヒャーは，『普遍的音楽技法(ムスルギア・ウニヴェルサーリス)』のなかで，1200年ごろに，ハーメルンの町でねずみの大発生があり，食糧をあらされた市民が窮地におち入っていたこと，奇妙な姿をした男があらわれ，報酬を約束させた上で，笛を吹いてねずみを退治したこと，報酬の支払いを拒まれ，怒った笛吹きは子どもたちをさらって消え失せたことなど，グリムとほぼ同じ内容を伝えており，さらにハーメルン市民は，子どもたちの失踪の日を起点として暦を数えていること，子どもたちがジーベンビュルゲンに現われたこと，笛吹き男は，神の隠された命にしたがい，子どもたちを地上の別の場所に導いていった悪魔であったこと，などを明記している。[12]

このようにみてくると，中世の史料に対し，これらの史料は，口伝から活字本へという伝達手段の変化もあって，主題が教義的になっているのがわかる。しかしその中で特徴的なのはフィンチェリウスにみられる子守娘の登場である。これが単に商業都市としてのハーメルン市の急成長による家庭生活の経済的ゆとりから生れたものなのか，あるいは，さらに進んでその結果，大人たちの子どもへのまなざしが変化したと考えられるのか，疑問が残る。もっとも，神学者，聖職者など高位高官がこぞってこの伝説の定義づけ，権威づけを行った経緯からみて，子どもへのまなざしの変化とみるのは不可能かもしれない。

さきにふれたアリエスは，近世以前子どもは子ども期を持たなかった，という理論を打ちたてながらしかし，この問題はさらに歴史のかわり目であった十一世紀から十三世紀という時期の研究がさらに必要である，とものべている。[13] この点に関しては学者の研究を待たねばならないが，ひとつの試みとして，アシジの聖フランシスコ (1181〜2—1226) について考えてみたい。聖フランシスコの，時代にさきがけた新しさを，G. K. チェスタトンは次のようにいう。「聖フランシスコは，自然に対する愛，動物に対する愛，社会的なあわれみの感覚，繁栄やはては財産が精神的な危険性をはらんでいるという感覚，等々において先んじていた。(中略) 彼はルネッサンスの暁の明星といわれてきた。」[14]

聖フランシスコの行伝『小さき花』(*The Little Flowers of St. Francis*

1322？）の16章「第三会」（The Third Order）の中に彼の生涯のひとつのエピソードがある。聖フランシスコは，瞑想の生活をすべきか，説教の旅に出るべきかに悩み，フライアー・シルベスターとシスター・クララに相談し，彼らをとおして神の意志をたしかめた結果，説教の旅に出る決意をする。彼は"Let us then go forth in God's name."と言って説教の旅に出る。

> …And St. Francis began to preach, first commanding the swallows to keep silence until his sermon were ended; and the swallows obeying him, he preached with such zeal that all the men and women of that city desired in their devotion to follow after him and forsake the city. But St. Francis suffered them not, saying, "Be not in haste to depart, for I will ordain what ye shall do for the salvation of your souls." And then he bethought him of the third Order which he stablished for the universal salvation of all poeple. …And he entered into the field and began to preach to the birds that were on the ground; and anon those that were on the trees flew down to hear him, and all stood still the while St. Francis made an end of his sermon; and even then they departed not until he had given them his blessing.(15)

これを小鳥の回心の話としてだけでなく，聖フランシスコがフランシスコ会の第一会（major Order 男子修道会）と第二会（minor Order 女子修道会）にかわるものとして，既婚者を含む人々が普通の人間の家庭や習慣を棄てないで会の運動に参加出来るように，第三会（The Third Order：修道会士で俗籍にある人々の団体で，修道会の規則に従いながら，教育に従事したり，病人の看護をしたりする）をその時着想した，というところに注目するならば，普通のもの，小さな者によせる聖フランシスコのまなざしが，子どもたちをもとらえていたことは間違いない。詩や音楽を愛し，中世劇の創設者の一人でもあった聖フランシスコは，中世同時代人の目には奇異に見えたとしても，のちのルソーやイギリス・ロマン派の詩人たちが子どもの発見にいたる道筋の源流を成してい

たと考えてよいのではないだろうか。しかし，このことが十六世紀以降のこの伝説の史料にも影響を及ぼしたとは言いきれない。

〈4〉

グリム兄弟は，民衆の精神をくみとるためには，伝説を学問的に分析するのではなく，伝説そのものの再現を心がけなければならない，という態度で収集にあたった。グリムのテクストをみてみると，この伝説の主テーマは，中心対周縁の二項対立関係であるといってよいだろう。この考え方は，構造論や記号論の中心概念の一つであるが，山口昌男氏が『文化の詩学Ⅰ』の中で多岐にわたる研究者とそれぞれのキイ・ワードをまとめているので，ここに引用しておく。(16)

ソシュール	言語(ラング)	ことば(パロール)
象徴主義者(マラルメ)	伝達的	詩的
B. デ・クルテネ	言語における意識	言語における無意識
ヤコブソン	伝達の言語	詩的言語
シクロフスキー	自動化	異化
ムカジョフスキー他	自動化	活性化
レヴィ＝ストロース	文化	自然(ブリコラージュ・仲介)
R. バスティード	——	短絡思考
トルベツコイ＝ヤコブソン	徴なし	徴つき
V. ターナー	構造(規範の共同体)	コミュニタス(過渡性)
E. リーチ	X(法的強制)	Y(神秘的影響力)
ケネス・バーク	能率	非能率(まわり道)
ケネス・バーク	定言(ステートメント)	逆定言(カウンター・ステートメント)
P. バーガー T. ルックマン	中心	周縁

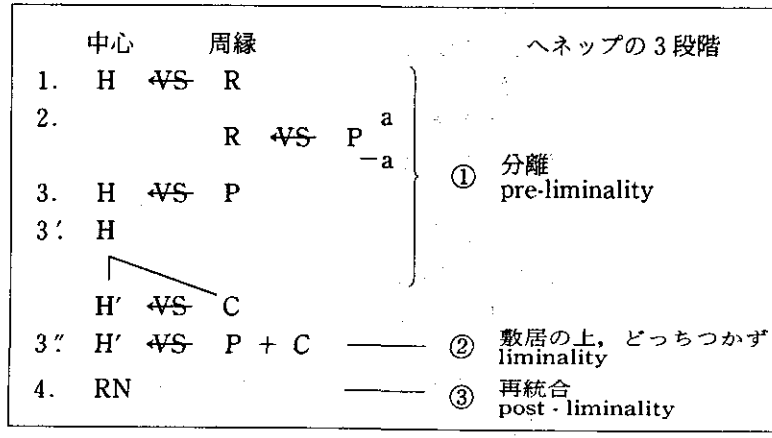
グリムのテクストでは，中心項には，市民たち，子どもたちの親，母

親たち，使者が入り，周縁項には，ねずみ捕り男（あるいは笛吹き男），ねずみ，子どもたち（市長の成人した娘，盲目と啞の子ども，子守娘を含む）が入る。ここで注意しなければならないのは，グリムが〝市民たち〟と言う時，いわゆる一般民衆のことではなく，近代以前の認識による家父長のことを意味していた，ということである。そうでなければ，ねずみ捕り男との約束や拒否をとりかわすことは出来ないだろう。市長や参事会員を登場させた方が，内容の上からみてふさわしいのではないだろうか。先にあげた『ドイツ神話伝説II』（松村武雄篇）や，R. ブラウニングの詩，さらにドイツの児童文学作家バルトスヘプナーが再話し，小沢俊夫訳の絵本『ハーメルンのふえふき』（原題は『ねずみ捕り男』，1984，偕成社）などはいずれも市長や議員が登場している。

さきにのべた中心対周縁の関係をあてはめてこの伝説を分析すると，次のようになる。

1. ハーメルン市（H）　対　ねずみ（R）
2. ねずみ捕り男（P）が現われ，報酬の条件つきで退治（a）。しかし約束不履行（−a）
3. ハーメルン市（H）　対　笛吹き男（P）
   ここで笛吹き男による外からのマイナスの力が加えられ，ハーメルン市の内実が顕在化する。
3′ ハーメルン市が大人（H′）と子ども（C）に分裂。
3″ ハーメルン市（H′）対　笛吹き（P）と子ども（C）
4. 大人たちが悲しむ。そのことが回復（RN）につながる。

これを記号化したものが次の図である（矢印は運動またはおびやかしの方向を示し，VS は対立関係をあらわす）



ベルギーの民俗学者，ファン・ヘネップは，「通過儀礼」にみられる三つの段階を，① pre-liminality ② liminality ③ post-liminality と名づけた。[17] ①は，日常生活からの分離をあらわし，②は周縁あるいは limen＝threshold，敷居を意味する。この段階で儀礼の主体は，儀礼以前の存在と，儀礼終了後のありようとの間のどっちつかずの状態に陥る。③は，新しい世界への再統合を意味し，ここで儀礼の主体は，儀礼以前とは異った認識をもつようになる。ヘネップは，このような通過儀礼はすべての文化に見られ，誕生，思春期，結婚，死亡など個人の人生の危機に行なわれるものと，平和から戦争へ，健康から疫病へなど，社会全体が重大な変化にみまわれた時にみられる集団的な危機の場合に行なわれるものとがある，としているが，これをハーメルン市の集団的な危機にあてはめてみたのが，上図の右側の三つの分類である。ここで重要なのは，3″と②の段階で，ここでさかさま世界が出現する。笛吹き男は，トリックスター（道化）であり，ねずみや子どもをおびきよせるのに音楽や遊びの力を必要とする。それらは権威や法に対立するものである。

さらに，「6月26日のヨハネとパウロの日」は，元来夏至の祭がおこなわれた日で，火まつりがくりひろげられた。そして一人の男が一人前になる儀式のおこなわれる日でもあった。人々は踊り狂い，町じゅうをねり歩く。カーニヴァルの日は，周縁が中心にとってかわる日でもあっ

た。ヴィクター・ターナーは言う。

部族文化における年中行事そして封建社会以降ないしは現代社会初期のカーニヴァルなど，集団的な境界性の事例をみると，日常生活において人々の上にのしかかる社会的現実を構成しなおすための斬新な方法を創造する群衆の役割，そして集合的な革新の行動のはたす役割が強調されていることがわかる。そこではすべてが開かれたものとなっており，集団的に「反省的」であり，人民は人民のために行動し，人民のおかれた状況や苦境を認識することによって，変革を行なってゆく。[18]

この伝説の場合，祭りではなく笛吹き一人の行為であるが，祭りという制度を通して集団が解決することを，個人のレベルで行うのが道化である。道化は，日常生活のパターンからはみ出したよそ者(stranger)として存在する。彼が目立つのは秩序の時間が停止するカーニヴァル的空間においてである。しかも秩序の内側に属さない存在という形で，潜在的にスケープ・ゴート（犠牲の山羊）的要素をそなえている。笛吹き男が報酬の約束を守ってもらえなかったのは，彼が旅芸人のようなよそ者であったこと，しかも何の労役もなく魔法の笛を吹いたので悪魔つきのように見られたことなどによるが，結局このことは一人前の男としてとり合ってもらえなかったことであり，子供扱いをされたということである。

〈5〉

次にイギリスの詩人，R. ブラウニング（1812—1889）の“The Pied Piper of Hamelin”（1842,「ハーメルンのまだら服の笛吹き男」）をみてみよう。これには A Child Story という副題がつけられ，〝若い W. M. のために書かれ，そして献げる〟という添え書きがある。この特定の人物 W. M. The Younger というのは，ブラウニングの友人ウイリアム C. マクリーディ（William Charles Macready,1793—1873）の息子のウィリー・マクリーディ（Willie Macready）のことで，父親は当時，英国の有名な舞台役者であり，ブラウニングの作品の主役を演じたこともある人であった。息子ウィリーが病気になった時，父親から「息子が挿絵を書くことが出来るような詩を作ってほしい」とたのまれて書いた二篇の詩

のうちの一つがこの詩であった。(ブラウニング研究家 H. C. Minchin によれば，ブラウニングはこれら二つの詩の材料を，十七世紀のコヴェントリーの牧師 Nathaniel Wanley の *Wonders of the Little World* (1678) か，Richard Verstegen の *Restitution of Decayed Intelligence in Antiquities* (1605) のどちらかから採ったと考えられる，といっている。[19])

そこで，ブラウニングは，絵の才能のある当時10歳のウィリーのために「ハーメルンの笛吹き男」伝説を，長短さまざまの十五連からなる物語詩に仕立てた。1842年5月のことである。そしてその年11月に『劇的抒情詩』(*Dramatic Lyrics*) の中に収め，出版した。当時ブラウニングは30歳，既に三冊の詩集を発表していたが，「ハメルンの笛吹き男」については，「どこまでも病床にあるウィリー少年のための童話であって，詩型で表現されてはいるが，自分としては優れたものとは考えていない」[20]と言っている。

しかしブラウニングが何と言おうと，そしてこの詩は彼の傑作とはいえないにしても，ひろく世界中で読まれたことは事実である。詩全篇をとうして，語りかけるような調子がつづくが，原詩は303行におよぶ長いものなので，とくにグリムのものとくらべて，目立った違いが見られる部分のみを次に抜き出しておく。一連，二連の導入部と市民の生活の情景は特にリズミカルに描かれている。そして三連でねずみの害に困りぬいた市民が団結して市に陳情にゆくが，グリムのものは，先にのべたように〈市〉イコール〈市民たち〉のように書かれていたが，ここでは市が為政者とそうでない人々とに分かれ，市民は声高に権利を主張している。

The Pied Piper of Hamelin;

A Child's Story

(WRITTEN FOR, AND INSCRIBED
TO W. M. THE YOUNGER)

I

Hamelin Town's in Brunswick,
By famous Hanover city;
The river Weser, deep and wide,
Washes its wall on the southern side;
A pleasanter spot you never spied;
But, when begins my ditty,
Almost five hundred years ago,
To see the townsfolk suffer so
From vermin, was a pity.

II

Rats!
They fought the dogs and killed the cats,
And bit the babies in the cradles,
And ate the cheeses out of the vats,
And licked the soup from the cooks' own ladles,
Split open the kegs of salted sprats,
Made nests inside men's Sunday hats,
And even spoiled the women's chats
By drowning their speaking
With shrieking and squeaking
In fifty different sharps and flats.

ハメリンの魔法の笛吹き

童　詩

(W. M. 少年のために)

1

ブランズウィックのハメリン市は
名高いハノーバの近くにあった。
ヴェーザ河の流れは深くて広く
市の南にある城壁を洗う
こんな楽しいところはほかにない。
だが，この話がはじまったのは
ほぼ五百年まえのこと
市民が動物の害にたいへん
悩まされたという哀れな話。

2

ネズミのやつめ！
犬に嚙みつく　猫を嚙み殺す
揺りかごの赤ん坊をかじる
槽のなかのチーズをなめる
料理人の手にした杓子のスープをすする
塩づけ鮒の桶を嚙みやぶる
よそ行きの帽子に巣をつくる
また，女たちのおしゃべりさえも
妨げて，話はうち消された
チュウチュウ，キーキー
高い音や低い音さまざま変わった音で

III	3
At last the people in a body	とうとう人々　団結して
To the Town Hall came flocking:	市の公会堂へおしかけた。
" 'T is clear," cried they, "our Mayor's a noddy;	「市長の無能ぶりははっきりした」
And as for our Corporation —— shocking	「議員ときたら —— あきれたもんだ
To think we buy gowns lined with ermine	貂(てん)の毛皮の衣裳なんか着せてなるもんか
For dolts that can't or won't determine	ネズミの害の仕末もようつけぬ
What's best to rid us of our vermin!	つけようともせぬ　間抜けもの！
You hope, because you're old and obese,	年ばかりくって，でぶでぶ　ふとっとるので
To find in the furry civic robe ease?	毛皮の公服　平気で着こむのか
Rouse up, sirs! Give your brains a racking	目をさませ，役人め！　脳みそを絞れ
To find the remedy we're lacking,	困っとるおいらの救済策みつけるのだ。
Or, sure as fate, we'll send you packing!"	そうせんければ，待ったなしの免職だぞ」
At this the Mayor and Corporation	これを聞いた市長や議員たち
Quaked with a mighty consternation.	あわてふためき，ふるえあがった。

十三連では出来事の伝え手が一人の跛になっている。そして大きな特徴は，子ども達が行きついたところ，即ち「あの国のこと」が詳しくかかれていることである。十四連では聖句（マタイ伝 19：24）を引用している。そして年号，日付のちがいから，グリムのものを典拠にしていないのがわかる。最後の連に教訓をつけ，それをカプレット（二行対句）にして締めくくっている。

XIII	13
The Mayor was dumb, and the Council stood	市長はだんまり　議員は棒立ち
As if they were changed into blocks of wood.	みんなは　まるで　丸太ん棒
Unable to move a step, or cry	はしゃいで　跳ねゆく　子供にむかって
To the children merrily skipping by,	一歩も動けず　声も出ず
—— Could only follow with the eye	笛吹きのあとを追う　陽気な群れを
That joyous crowd at the Piper's back.	眼で見送るのが　精いっぱい。
But how the Mayor was on the rack,	だが，市長はいま　ほとほと困りぬき
And the wretched Council's bosoms beat,	議員の胸も　痛んでドキドキ。

As the Piper turned from the High Street	それというのも，笛吹きが本通りを曲ってゆくと
To where the Weser rolled its waters	子供や娘の行く手の真向かいに
Right in the way of their sons and daughters!	ヴェーザの波が　打ち寄せていた。
However he turned from South to West,	けれど　笛吹きは　南から西に折れ
And to Koppelberg Hill his steps addressed,	コペルバーグ山のほうへ　進んでいった。
And after him the children pressed;	子供たちは　引きよせられて　追っかける
Great was the joy in every breast.	めいめいの胸は　うれしくてワクワクしてた。
"He never can cross that mighty top!	「あの男には　あのでっかい峠はよう越せまい！
He's forced to let the piping drop,	笛を吹くのも　止めねばなるまい
And we shall see our children stop!"	そしたら　子供たちも　とまるはず！」
When, lo, as they reached the mountain-side,	そのとき，見よ，かれらが山腹についたとき
A wondrous portal opened wide,	不思議な門が大きく開いて
As if a cavern was suddenly hollowed;	まるで，洞穴がポッカリ　くぼんだよう
And the Piper advanced and the children followed,	笛吹きは進み　子供たちは　ついてゆく
And when all were in to the very last,	やがて，総勢のこらず　はいったとき
The door in the mountain-side shut fast.	山腹の戸は　ぴったり閉じた。
Did I say, all? No! One was lame,	総勢と言ったかな？　いや，一人の跛(ぴっこ)は
And could not dance the whole of the way;	終わりまで　ずっと　踊ってはゆけなかった。
And in after years, if you would blame	何年かたって，その子の悲しげな
His sadness, he was used to say,——	様子をなじれば，いつも　こう言った ——
"It's dull in our town since my playmates left!	「ぼくの友達が，いない町はつまらないや！
I can't forget that I'm bereft	忘れやしない，仲間が楽しい景色を
Of all the pleasant sights they see,	見てるのに，ぼくだけ　見られなかった
Which the Piper also promised me.	それを，笛吹きが　見せてやると言ったんだ。
For he led us, he said, to a joyous land,	愉快な土地へ　連れてってやると言ったんだ。
Joining the town and just at hand,	市の隣りにつづいて　すぐ近い
Where waters gushed and fruit-trees grew	泉は涌くし　木の実は生(な)るし
And flowers put forth a fairer hue,	花はきれいに　咲いてるし
And everything was strange and new;	みんな　珍しくて　新しい
The sparrows were brighter than peacocks here,	雀は　ここの孔雀より　きれいな色
And their dogs outran our fallow deer,	そこの犬は　ここの茶色な鹿より速い
And honey-bees had lost their stings,	蜜蜂には　針がなく

And horses were born with eagles' wings:
And just as I became assured
My lame foot would be speedily cured,
The music stopped and I stood still,
And found myself outside the hill,
Left alone against my will,
To go now limping as before,
And never hear of that country more!"

鷲の翼のある馬が　生まれるんだ
そして，ぼくの跛も　すぐに
治してくれると　知ったとき
笛が　ぱったりやんで，ぼくはまだ　立っていた。
ぼくは　山のそとに　残されたんだ。
望んでいたのに　ひとりぼっちで
もとのように，いまでも跛
あの国のことは　もう聞かれない！」

XIV

Alas, alas for Hamelin!
　There came into many a burgher's pate
　A text which says that heaven's gate
　Opes to the rich at as easy rate
As the needle's eye takes a camel in!
The mayor sent East, West, North and South,
To offer the Piper, by word of mouth,
　Wherever it was men's lot to find him,
Silver and gold to his heart's content,
If he'd only return the way he went,
　And bring the children behind him.
But when they saw 't was a lost endeavour,
And Piper and dancers were gone for ever,
They made a decree that lawyers never
　Should think their records dated duly
If, after the day of the month and year,
These words did not as well appear,
"And so long after what happened here
　On the Twenty-second of July,
Thirteen hundred and seventy-six:"
And the better in memory to fix
The place of the children's last retreat,

14

ああ，ああ，ハメリンの市よ！
　多くの市民の　頭に浮かぶのは
　聖書の一節，富んでいる者が
　神の国にはいるよりは，らくだが針の穴を
通る方が，もっとやさしい！
市長は　東西南北に　人を遣わした，
笛吹きを見つけ次第
　申し出た者にはいつでも
望み通りの金銀を与える，
もし，笛吹きがもと来た道を引き返し
　子供をつれて帰ってくれば，と。
だが，それも骨折り損だった。笛吹きと
踊る子供が，帰らぬとわかると
一つのお布令が出された，法律上の
　正規の文書の日付けには
必ず，年月日を
記入し，その次に「1376年
　7月22日に
発生したこの災難後何年何月何日目と記入すること。」
さらに子供たちの　さいごの隠れ場を
記憶にとどめておくために

They called it, the Pied Piper's Street ——
Where any one playing on pipe or tabor
Was sure for the future to lose his labour.
Nor suffered they hostelry or tavern
　To shock with mirth a street so solemn;
But opposite the place of the cavern
　They wrote the story on a column,
And on the great church-window painted
The same, to make the world acquainted
How their children were stolen away,
And there it stands to this very day.
And I must not omit to say
That in Transylvania there's a tribe
Of alien people who ascribe
The outlandish ways and dress
On which their neighbours lay such stress,
To their fathers and mothers having risen
Out of some subterraneous prison
Into which they were trepanned
Long time ago in a mighty band
Out of Hamelin town in Brunswick land,
But how or why, they don't understand.

まだら笛吹き通りと名をつけた ——
そこでは，誰にせよ，笛や大鼓を鳴らしたものは
今後いっさい　仕事にありつけぬ。
茶屋でも宿屋でも，それほど厳粛な通りを
　音曲で　さわがすことはまかりならぬ。
洞穴のあった場所の向かいには
　柱を建てて　事の次第を誌し
大教会の窓ガラスには　同じことを
絵模様で描き　世に知らせた
おびき出された　子供の話を。
今でもそれは　昔のままに残っている。
ここで，言っておきたいことは
トランシルヴァニアの山国に
いっぷう変わった　種族がいて
近所の人も眼を見張る
その異国風な身なりや習わしは
かれらの先祖が　そのむかし
ブランズウィックのハメリン市から
大きな集団となって　おびきよせられた
その地下牢から　出てきたためであると言う。
けれども，どんなわけかは誰にもわからない。

XV

So, Willy, let me and you be wipers
Of scores out with all men ——
　　especially pipers!
And, whether they pipe us free from rats
　　or from mice,
If we've promised them aught, let us keep
　　our promise!(21)

15

そこで，ヴィリーよ，おたがいに
人から借りたお金は　返しておこう ——
　　とくに笛吹からの！
笛吹いてネズミ，二十日ネズミを退治しても
いったん約束すれば　約束は守りたいね。(22)

ブラウニングはこの詩を,「子どものために書いた童話」と言っているが,この中には劇の要素が多くふくまれており,人物とくに市長や笛吹き男の性格,心理の描写が優れている。そういった手法とは別にこの詩の中で,ブラウニング独自の想像力がどこまでひろがっているかは,彼が用いた典拠を調べてみなければわからないが,私は,十三連の「あの国」の部分と,十五連の教訓は彼独自のものではないかと考えている。

イギリスの歴史学者P.カヴニーによれば,イギリス・ロマン派の子ども像,つまり「無垢なる子ども」という考え方の萌芽は,ルソーの『エミール』(1762)からワーズワースの『序曲』(*The Prelude*, 1805)までの約半世紀の間であったという[23]。この流れの中で,形式にとらわれない奔放なブラウニングも,宗教や合理思想などのヴィクトリア朝前期の時代の影響をうけずにはいられずに,ウィリー少年に生真面目な道徳を書きそえたのであろう。笛吹きが見せてくれると言った「あの国」の描写も,子どもを理解し,精妙な文学を生み出した当時のイギリスの新しい文学者が提唱した想像力のあらわれとみてよいだろう。このように考えると,ブラウニングのこの詩の場合,教訓をつけ加えることで,本稿14ページの図式の4の〈回復〉を行った,とみることが出来る。しかしブラウニングのこの詩の中にみられる子どもの姿は,大人に理解され,子ども部屋を与えられてはいたものの,まだ充分に〝子ども時代〟を生きているとはいえなかった。

〈6〉

1888年に,ブラウニングの詩に挿絵を描いたイギリスの挿絵画家ケイト・グリーナウェイ(1846—1901)は,この伝説の最大の謎になっていた「子ども達はどこへ行ったか」という問に,独自の答を出した。グリーナウェイは,彫り師であり版下絵師でもあったジョン・グリーナウェイの娘で,めぐまれた環境にあり,美術専門学校で画を学んだ。父の友人であり,当代きっての印刷技術者で,木版多色刷りの機械化にとりくみ,出版と美術印刷を結びつけたエドマンド・エヴァンズは,彼女の絵を多色印刷の明るくてあたたかいものに仕上げた。その最初の絵本『窓の下で』(*Under the Window*, 1878)は当時の時代要求にぴったり合っ

て評判になった。その上グリーナウェイは，美術批評家のジョン・ラスキン（1819—1900）に認められた。ラスキンはイギリスの美術批評の礎となった『近代画家論』（*Modern Painters*，1843－60）を著し，ラファエル出現以前の素朴な画風にたちかえろうと主張するラファエル前派を支援し，ターナーの画を擁護した。60年頃からは機械文明に抵抗する社会思想家として活動し，読書や教育，女性の教養や義務を論じた『ごまとゆり』（*Sesame and Lilies*，1865）は，新しい社会主義の書として注目を集めた。当時表面化しつつあった社会悪は，人々にユートピア志向をいだかせていたのであった。1882年ラスキン63歳，グリーナウェイ36歳の時から二人は親交を結び，以後ラスキンの没年まで文通をつづけた。子どもの人権擁護運動をすすめていたラスキンの影響もあってグリーナウェイは，子どもの本性を見出し，理解し，賛美した。ありのままの姿を描写することと，力強い単純さをもっと心掛けるようにとのアドヴァイスを重ねていたラスキンであったが，1888年グリーナウェイがブラウニングの物語詩を絵本にした時，すでに病の床にあったラスキンは，彼女にあてて次のような手紙を送っている。

ケイト・グリーナウェイ様　　ブラントウッド・，五月一日，1889

今日は一日中，あなたとメイ・ディの花摘みをたのしみました。ずっとあけなかったひき出しをあけたところ——今日それをあけたことを感謝しています——美しい絵が何枚も出てきて，ヤマハッカやばらや百合の甘い香りが書斉に満ちたというわけです。私が病気になる直前に，あなたはなんてすばらしい絵をおくってくれていたのでしょう。花のアーチをくぐる子どもたちなどの……。

ジョーン*はあなたが今もこれと同じ背景で，今までよりももっと大きな美しい絵を描いていると話してくれました。もちろん『笛吹き』は，あなたのこれまでの絵本の中で最高のものです。—笛吹きそのものがこの上なくいいですね——私は，丘から笛の音がひびきわたってきて，すばらしい絵，春の証人でもあるあなたの絵の中で，何度も春がたのしめるような気がします。

（*ジョーンは，ラスキンの世話をしていた親戚のジョーン・セヴァーン夫人）

To Miss Kate Greenaway

Brantwood, May-day, 1889

I've been a-maying with you all day,—coming upon one beautiful thing after another in my drawer, so long unopened—most thankfully to-day unlocked again—and sending balm and rose and lily sweetness all through the old study. What exquisite drawings those were you did just before I fell so ill,—the children passing under the flower arch—etc! and Joan tells me you are doing such lovely things now with such backgrounds,—grander than ever, and of course the *Piper* is the best book you ever did—the Piper himself unsurpassable—and I feel as if he had piped me back out of the hill again, and would give some spring times yet to rejoice in your lovely work and its witness to them.(24)

また翌々日の手紙では『笛吹き』の背景のイメージを次のように言っている。

あなたは立派な仕事をなしとげました。『笛吹き』の中のいくつかの絵は，白い背景ではあるけれども素晴らしい。あなたは青い山にみちびかれ，緑の谷に入っていって，もっと深い色合い，もっと深い音の世界に，そして数えきれないほどたくさんのところに到達するのでしょうね。

3rd May, 1889

You are doing great work already—some of the pages of the *Piper* are magnificent pictures, though with a white background—you will be led by the blue mountains and in the green glens to a deeper colour—melody—and—to how much else there is no calculating.(25)

この絵本の中の，感情をあらわにした大人たち，ラスキンも称賛した笛吹きの存在感，そして躍動する子どもたち，さらに，穀物の商いで栄えた水車の町ハーメルン市の水車を描きこんだ市の紋章など，いずれに

◀図1

▲図2

も彼女の細心の心くばりがうかがわれるが，表紙および口絵にくり返される子どもの楽園（図1参照）の漸新さは特にすぐれている。これは，例えばドイツの画家ルーカス・クラナッハ（1472—1553）の'The Paradise'にみられる楽園そのものの構図をとりながら(図2参照)，アダムとイブのパラダイスではなく，りんごの木にはまだ花が咲き，子どもたちが主人公であるまさに子どもの楽園である。グリーナウェイは，ヴィクトリア朝に生きる女性の目で子どもをとらえ，エネルギーあふれる子どもの群像を描くことで挿絵によってこの伝説に全く新しい解釈をこころみた。グリーナウェイをまってはじめてこの伝説の子どもたちは，子どもの領分を与えられたのであった。

チェスタントは，ヴィクトリア朝には二つの文学があらわれたと言う。それらは，純粋に子どもを目当てにした文学と，純粋におかしみを目当てにしたもので，前者はG.マクドナルドに代表され，後者はエドワード・リアやルイス・キャロルに代表される，と考えた。彼の言葉をかりれば，「マクドナルドの書いたお伽噺は，あらゆる経験をお伽噺と化してしまう不思議な力を持っている。誰でも妖精の糸の端を手にしていて，その糸に導かれ，かならず楽園にたどりつかずにはいられない」[26]のであるが，グリーナウェイもこの意味において，マクドナルドと流れを同じくしており，その水脈はユートピア（あるいは逆ユートピア）の系譜となって，形をかえながら今日までつづいているのである。

〔注〕

(1) 阿部謹也,「ハーメルンの笛吹き男」(平凡社, 1974) pp. 14—17
(2) 谷口, 村上, 風間, 河合, 小沢, レレケ,「現代に生きるグリム」(岩波書店, 1985) p. 18
(3) 高橋健二,「グリム兄弟」(新潮選書, 1968) p. 156
(4) 阿部, p. 22
(5) ibid. p. 23
(6) ibid. p. 24
(7) P.アリエス, 杉山光信・恵美子訳,「子供の誕生」(みすず書房, 1980) p. 385
(8) 阿部, p. 166
(9) ibid. p.174
(10) ibid. p. 19
(11) ibid. p. 20
(12) ibid. p. 18
(13) アリエス, p. 10
(14) G. K. チェスタトン, 生地竹郎訳,「チェスタトン著作集 6」(春秋社, 1976) p. 6
(15) The Little Flowers of Saint Francis, Everyman's Library (Dent, London, 1975) p. 29
(16) 山口昌男,「文化の詩学 I」(岩波現代選書, 1983) p.179
(17) ファン・ヘネップ, 綾部恒雄, 裕子訳,「通過儀礼」(弘文堂, 1977) p. 17。ヴィクター・ターナー, 梶原景昭訳,「象徴と社会」(紀伊国屋書店, 1981) p. 305
(18) ターナー, p. 332
(19) James F. Loucks (ed) Robert Browning's Poetry, Norton Critical Editions (New York, 1979) p.75。大庭千尋訳,「ブラウニング詩集」(国文社, 1977) p. 296
(20) 土屋潤身,「詩人ブラウニングの世界」(八潮出版社, 1980) p.239
(21) Robert Browning's Poetry, p. 75
(22) 「ブラウニング詩集」p. 42
(23) ピーター・カヴニー, 江河徹監訳,「子どものイメージ」(紀伊国屋書店, 1979) p. 30
(24) Letters of Ruskin Vol. II p. 608
(25) ibid. p. 609

(26) G. K. チェスタトン, 安西徹雄訳,『チェスタトン著作集 8』(春秋社, 1979) pp. 140—141

北星学園大学文学部北星論集第24号正誤表

頁	誤	正
12	(本文７行目) 構造論	構造主義
26	(注(15)) The Little Flowers of Saint Francis	*The Little Flowers of Saint Francis*
〃	(注(19)) (ed) Robert Browning's Poetry	*(ed.), Robert Browning's Poetry*
〃	(注(21)) Robert Browning's Poetry	*Robert Browning's Poetry*
77	(本文９行目) 本人が疾病再発のための通常の	本人疾病再発のため通常の
81	(第13図) ▒ クライエント 25.7%　1.53 ▨ 家族 40.5%　2.41	▨ クライエント 25.7%　1.53 ▒ 家族 40.5%　2.41